

## 勝山市における白山文化遺産デジタルアーカイブ

勝山市教育委員会 学芸員 宝珍伸一郎

### 1. 平泉寺と白山文化遺産について

平泉寺は霊峰白山（2,702m）の越前側の登山口に開かれた山岳寺院である。創建は養老元年（717）と伝えられ、古代から中世後期にかけては白山信仰を背景に強大な宗教勢力に成長した。最盛期の戦国時代には、境内に「四十八社・三十六堂・六千坊」が建ち並び、寺領は「九万石・九万貫」、僧兵は「八千」を数えたという。しかし、天正2年（1574）、一向一揆の攻撃を受けて全山焼失した。

その後、九年の歳月を経て境内中心部は再興されていくが、「六千坊」と呼ばれた僧侶の住居は「六坊二か寺」となり、「九万石・九万貫」を誇った寺領はおよそ340石に留まった。境内は10分の1に縮小し、多くの坊院跡は山林や田畑、人家の下に埋もれた。さらに、明治の神仏分離令に際しては平泉寺の寺号が廃止され白山神社となった。

平成元年度から始まった、かつての境内の広がりを確認する発掘調査では、東西1.2km、南北1kmに及ぶ広大な範囲から、石畳道や石垣など、石を多用した中世宗教都市の一端が姿を現しつつある。

今回、各地に残る平泉寺や白山信仰に関わる遺構、旧跡、巨樹や巨木、石碑、さらには伝統行事や祭礼等を調査し記録に残すことで、白山文化遺産の全容に迫ることができた。

### 2. 今回のデジタルアーカイブ取り組み者

勝山市市史編さん室

山田雄造 氏

勝山市文化財保護審議委員長

北川博正 氏

	表 題	点 数	作成者
1	勝山市内のふくいの伝統民家	3 0 0	山田雄造
2	勝山市の神社	1, 9 4 1	山田雄造
3	勝山市の伝統行事・祭礼	2, 0 0 7	山田雄造
4	福井県最大の河川九頭龍川	3 7 5	山田雄造
5	九頭龍川に流れ込む河川	3 6 6	山田雄造
6	史跡白山平泉寺旧境内と平泉寺墓地	6 9 9	山田雄造
7	白山禅定道と河上御前の御開帳	6 2 8	山田雄造
8	平泉寺にかかわる堂舎・石碑・史資料など	4 7 3	山田雄造
9	七里壁と旧勝山三町の景観	1, 0 2 9	山田雄造
10	県指定民俗文化財勝山左義長	1, 9 4 4	山田雄造
11	勝山市の巨樹・巨木	3 1 9	北川博正
	合計	1 0, 0 8 1	

### 3. 勝山市と白山文化遺産群

勝山市は昭和 29 年に勝山町と周辺の 8 か村（平泉寺、村岡、野向、北谷、荒土、北郷、鹿谷、遅羽）が合併し誕生した。

勝山市の中心部にあたる勝山町は、16 世紀代の記録「平泉寺賢聖院院領目録」には袋田と見える。この地は九頭龍川の形成した河岸段丘上にあたり、福井や大野へとつながり、白山麓の村々とは谷道を通じて交わる交通の要衝の地であった。

勝山の名の由来は、平泉寺と戦った一向一揆勢が村岡山を拠点として勝利をおさめた事から、この山を「かちやま」と呼び、現在の勝山の地名につながったとされる。

古代・中世には、勝山の中心部は平泉寺にあったが、平泉寺焼失後、柴田勝家の一族、義宣が袋田に入り、この地が勝山の中心になっていく。さらに元禄 4 年（1691）、小笠原氏が二万二千石で勝山の地に入部し、本格的な城下町が整備された。

#### （1）勝山市内のふくいの伝統民家

勝山市域には、歴史的な民家が多く残る。特に勝山城下町には江戸時代の面影を残す町家が連なる。

福井県では、こういった歴史的な建物を保存するため、平成 18 年（2006）から「福井県伝統的民家の保存および活用の推進に関する条例」を施行した。これは、所有者が県に「ふくいの伝統的民家」として申請し、認定を受ければ保存についての支援が受けられるというものである。

認定基準は県内のそれぞれの地域で受け継がれてきた「妻壁を柱と梁で格子状とした漆喰塗の切妻屋根の農家」や、「格子戸等町家の伝統的意匠を基調とした切妻屋根の町家」、外観を地域の伝統的民家の意匠を基調とした木造の建物などとしている。

勝山市内では現在までに 101 の家が認定されている。

#### （2）勝山市の神社

村々の鎮守社として、白山神社が市域では約 5 割を占める。白山神は、平野部に水を分け与える神として信仰を集めたことから、白山山頂の神を平泉寺に祀り、さらに村々の鎮守社へと勧請している。

平泉寺町では、村社の 4 分 3 が白山神社となっている。

市内全体でみていくと、白山神社は 48 社、次いで八幡神社が 11 社、神明神社が 6 社と続く。

勝山町の光明院にはかつて白山社が祀られており、町の北の守り神として創建された。白山登山の際は先ずここにお参りしたが、現在は神明神社境内に移されている。十王堂は閻魔堂とも言われ、平泉寺の祭礼の前日にここで祭礼が行われた。

#### （3）勝山市の伝統行事・祭礼

勝山町の行事としては、「御前相撲」「年の市」「走りやんこ」、村部の行事としては、「観音様のおおすめ」「滝波のお面さん祭り」「谷のお面さん祭り」「谷のはやしこみ」などがある。

滝波と谷のお面さん祭りは、天正2年の平泉寺焼き討ちの際、小原村の住人が7つの面を持ち帰り、不吉なことがあったので川に投げ捨てたところ、谷村で4面が拾われ、下流の滝波村で残り3面が拾われ、祀られたことに由来するという。

#### **(4) 福井県最大の河川九頭龍川**

九頭龍川の水は、白山山系から流れ出し、福井平野を潤し、三国湊で日本海に注ぐ。豊作や凶作は、平野の人々から見れば、白山神の左右するところと考えられ、白山神を祀る平泉寺は聖域として認識されていく。

平泉寺境内の中心部から湧き出る清水は、泰澄が白山神の降臨をみたとされる神聖な池で、この水は、白山神からの恵の水と考えられたようである。白山神を祀る平泉寺には九頭龍川流域の有力者の一族が坊を構え、中世には六千坊と呼ばれるような隆盛を誇る。

#### **(5) 九頭龍川に流れ込む河川**

九頭龍川右岸の白山山系から流れ込む河川も重要である。女神川は、平泉寺の背後から流れ出し、流域には滝や洞窟、岩場などの行場が作られている。荒土町を流れる皿川(さらがわ)は、流域の伊波区に平泉寺七社の一つ、一宮である佐良宮が祀られていたことに由来するとされる。中世には白山社の御輿がここまで行幸したという。

#### **(6) 史跡白山平泉寺旧境内と平泉寺墓地**

古代から中世に隆盛を誇った平泉寺境内約200ヘクタールは、当時の遺構が良好に残ることから、国の史跡に指定されている。

また、中世に平泉寺に住んでいた人々の墓地が、境内の南側に作られており、「平泉寺墓地」と呼ばれる。墓地内には室町末期の石仏や五輪塔、宝篋印塔が約550点確認されている。その他、元正天皇や平泉寺を再興した顕海にかかわる石碑もあり、墓地全域が市の文化財に指定されている。

#### **(7) 白山禅定道と河上御前の御開帳**

白山禅定道は、泰澄大師が養老元年(717)に白山神の導きで切り開いた白山への参詣道である。平泉寺から白山山頂までは「十二宿」と呼ばれる宗教施設を通り、山頂に登拝したとされる。現在、道の途中には、巨木や室跡、修行場と思われる遺構が点在する。

天正2年の平泉寺焼失後、再興するにあたり、平泉寺の御神体は禅定道沿いの河上御前社から移されたという。そうしたことから、平泉寺白山神社の本殿は「河上御前」と呼ばれる。

この本殿は、33年に1度、御開帳が行われる。33という数字は、平泉寺の本来のご本尊が十一面観音であり、観音は三十三に姿を変えて人々を救うとされることと関係しているようである。

御開帳が確認できる史料は、宝永7年(1710)まで遡ることができる。近代に近づくにつれ興行的な要素が強くなり、境内には露店がたち並び、見世物も行われたようである。

## **(8) 平泉寺にかかわる堂舎・石碑・史資料など**

中世に四十八社・三十六堂と呼ばれた平泉寺の主要な伽藍の跡は、遺構や絵図、石碑などから、ある程度その位置がわかる。さらに、平泉寺の周辺には、墓地や四至内、修行場や泰澄ゆかりの旧跡が点在している。

## **(9) 七里壁と旧勝山三町の景観**

七里壁は、九頭竜川が形成した河岸段丘で、勝山市の大渡から下流の永平寺町鳴鹿まで、およそ七里にわたって続くことから、その名がつけられたという。

勝山城下町では、この河岸段丘を利用して城郭・武家地と町人の住む町が分けられた。段丘下に広がる町人の町は、慶長期以降は「勝山三町(袋田町、郡町、後町)」と呼ばれ、袋田町の枝町として沢・長淵町が発展した。

江戸時代以降、勝山三町を含む九頭龍川流域は、洪水との戦いであり、さらに町は幾度もの火災にも見舞われた。

左義長の祭礼は鎮火祭として町人たちのつながりを強める町行事として定着し、御前相撲、顕如講とともに町の三大行事となった。

## **(10) 県指定民俗文化財勝山左義長**

勝山市を代表する無形民俗文化財は、県の文化財に指定された勝山左義長である。2月の最終土曜・日曜(旧暦では1月13・14日)の両日、三色の短冊が風になびく中、「蝶よ花よ 花よのネンネ…」の囃しが街中に響きわたる。

勝山左義長が史料に見られるのは延享4年(1747)からである。当初はドンド焼として始まったが、18世紀中期には、三町の相次ぐ火災により、鎮火祭としての色彩が濃くなる。それと同時に祭りとしての娯楽的要素も加わった。街路には櫓が建てられ、その上で太鼓をたたき、また能・歌舞伎の演目が素人役者によって演じられた。さらに三色の短冊が町中に吊るされ、ご神体には包みを吊るし、各町では競って押し絵が製作された。後には干支に因む作り物も展示されるようになる。

ファイナーレは九頭龍河畔で行われるドンド焼で、2日間で約10万人の人々が訪れ、奥越に春を呼ぶとされる左義長が終わる。

## **(11) 勝山市の巨樹・巨木**

市内各地に巨樹・巨木が点在する。これらの多くは、社寺の境内に植えられたものである。市内最大の幹周りをもつのは、北郷町岩屋の大杉で、約17mを計る。

平泉寺には天正2年の焼き討ちで焼け残った杉が7本あるとされ、「平泉寺七本杉」と呼ばれている。それらは幹周りが5m以上となっている。

白山禅定道沿いにも巨木が点在しており、付近は平坦地となっていることから、何らかの宗教施設があったと考えられる。これらの巨木は神罰をおそれて伐採されず現在まで残ってきたものと考えられる。